

長女を小児がんで亡くした父親が、会社を辞め、いのちの語り部になった。いのちをバトンタッチする会の代表の鈴木中人は、小中学生や企業人らに「いのちって何だろう」と問いかけ、大切なものは何か、どう生きるかを考えるきっかけづくりをしている。家族との間で育まれるべき「いのちの感性」が薄れる社会を変えようと。

### いのちからくる キーワードを感じ取ると、 生きることが肯定的になる。

「生き方も働き方も多様化し、自分はどう生きたらいいか、どう働いたらいいかを見失っている人がたくさんいます。目先のことを考えがちですが、自分にとって大切なものは何かという原点が重要だと、私は思います。何が大切かは、いのちという言葉から見えてくる。でも今、いのちを見つめる感性が薄れてきています」

いのちは大事なものだと思わなくていい、実感しながら生きているかと言われると心もとない人は多いだろう。いのちという言葉から感じとれることが失われつつあるから、自分はどう生きるかが見えなくなり、生きること自体が軽くなっている。いのちをバトンタッチする会の代表の鈴木中人は、そう考えている。

鈴木は、小中学生や企業人らに「いのちって何だろう」と問いかけ、そこから何が大切か、どう生きるかを考えてほしいと、「いのちの授業」を続けている。大手自動車部品メーカーに勤めていた鈴木は、企画部門の次長だった2004年、46歳で会社を辞めて翌年に会を設立した。小児がんで亡くした長女のことを伝えよう

と考えたからだ。

いのちを見つめると、どう生きるかを考えることにつながるの、なぜですか？

「いのちには、「つながっている」「支えられている」「限りある」といったキーワードがくっついていきます。そこから「尊敬を持つ」「感謝する」「一生懸命」など、人と関わって生きる上で大事なことに気づきます。例えば、自分のいのちには自分だけのものじゃないという感覚を持つのと持たないのでは、生き方がまったく違う。いのちからくるキーワードを感じ取ると、生きることが肯定的になると思っています」

「ただ、いのちには、つながっている」って、筆記試験でも書けますよね。いのちを、頭で理解しようとする前に、体験からくる実感によって、いのちを大切に育まれることが大事で、そのカギとなるのは家族です」

いのちや、それに連なる言葉を、知識として答えているだけでは生き方に反映されない。例えば、いのちには限りあるものと気づき、だから今を懸命に生きようと行動するエネルギーは、「いのちには有限だ」という机上の知識ではなく、誰かの死に接した体験から「限りあるいのちを大切にしたい」という感性が宿っていることによって、生まれるものだ。感性は、日々の生活

における実践でしか育めないからこそ、家族の役割が大きいと鈴木は言う。

「私が保育園に通っていたころ、祖母とお墓参りに行きました。祖母はお墓の前で「このお墓には、ばあちゃんの子どもが3人いるんだよ。みんな病気で、かわいそうなお墓をした。でも、お墓の中で、みんなのことを守っているんだよ。ばあちゃんももうじきお墓に入るけど、みんなのことを守るからね」と言って涙を流すんです。私は祖母を見て「お墓、大切にしまさなきゃ」って思いました。それは理屈じゃなくて、誰かが亡くなるお墓に涙を流すんだ、いのちや家族はつながっているんだという実感でした」

「家族は、相父母、両親という世代の縦のつながりと、いま生きている人との横のつながりがクロスする場所です。家族との生活の中で、自分のいのちが多くの人に愛され、支えられ、つながっているという実感を持つことが、いのちの感性を育みます。子どもは、その感性を持って社会へ出ていくのです」

しかし今、親から子どもへの愛情は、家を建てよう、教育費を稼ごうといった、外形的なものへ傾斜している。鈴木も、それは個々の家庭の価値観だからと認めつつも、家族だからこそ生活の中で伝えられること——いのちの感性を伝えること——を、一人ひとりが考えなければならぬと、強く感じている。そのきっかけを提供したいというのが、「いのちの授業」だ。

鈴木も「私も、子どもが小児がんになるまでは、『家族は大丈夫』と信じてながら、家や山世が先でした」と笑う。鈴木は長女の景子は、1992年、3歳で発病し、6歳で亡くなった。

## TOP RUNNER

## TR

自分がいたただいたものを  
バトンタッチすることが、  
人生のテーマだ。

「闘病中は不条理への怒り、諦めや絶望が繰り返され、亡くなったときは罪悪感に苛まれました。悲憤が募り、がむしゃらに仕事に打ち込みました。体験を自費出版しようとしたのですが、最初の原稿は怒りばかり。それを書き直しながら内親し、死別から5年経ったとき、本で「子どもの分まで生きる」という言葉に出会って、どっと涙が出ました」

「じゃあ、私は何をしたらいいんだろう。そう思ってアンテナを立てたら、それまでつらかったことがばかり覚えていたのに、台風の中を子どものためにハンバーガーを買いに行ってくれた先生、下の子どもを預かってくれた近所のおばさんなど、自分たちが支えられていたことを思い出そうになっただけです」

それで鈴木は、「自分がいたただいたものをバトンタッチすることが、人生のテーマだ」と、会社に勧めながら、休日に「いのちの授業」を始めた。3年ほどしたある日、介護施設を訪れた鈴木は、「いま体が動くうちに大切にしたい思いに生きよう！ 人生二度なし」と会社を辞めて「いのちの授業」に専念。「長男は中学生でしたし、「いのちで飯が食えるか」とも思

いましたが、子どもの分まで生きるんだから、やるだけやってダメならいいじゃないかと」

鈴木が「いたただいたもの」とは何だろうか。それは、先生や周囲の人に支えられて家族がやってこられたという思いであり、何より、生き抜こうとする景子から受け取ったメッセージだ。人に尊敬を感じること、感謝すること、懸命に生きることすべて、いのちを媒介としたものだ。鈴木は、景子の発病、闘病、そして死を、言葉と写真で伝えながら、この「いたただいたもの」をつないでいる。

鈴木は授業が、いのちの感性を取り戻させるのは、空気のように存在しているのが普通だと思っていたいのちが、そうではないと気づくからではないか。いのちに返るキーワードをあらためて実感することで、そこから何を大切に生きていくかを考え始めるのだろうか。

経験が経験だけに、鈴木は使命感に駆り立てられ、悲憤感を漂わせているのかと想像していた。しかし、時間とともに自らを内視したためか、知的で穏やかで笑みも交えた話しぶり、もとの人柄が滲み出てきているのだから。言に力が入っていないから、話に引き込まれていく。

「初めは、「鈴木さん、あのころ怖かった」って言われるくらい、力が入っていません。でも会を設立して2年目くらいに、ある

限界を感じたんです。小学校で「いのちの授業」をしたとき、薄ら笑いして聞いている子がいた。気になって、あとで校長先生に尋ねると、虐待された経験のある子でした」

「子どものために涙を流す姿は、虐待された子どもには怖い世界の話なんだと気づきました。だから、私の話では届かない人もいる、いつか感じてくれるだけかもしれないんだなって。でも一方で、そういう子どもたちの心を開くには、地域の人や周りの人が、もう一回つながりを持たなくちゃいけないから、学校の先生とか医療福祉職とかカウンセラーを目指す人たちに声をかけて、いのちを考えるきっかけとなるような講座を、大学で試行しはじめています」

心の土台に、いのちの感性が宿っていないなら、授業で気づかせることはむずかしいだろう。それが少数事例ではなくなってきている世の中だからこそ、鈴木は活動の幅を広げている。

「私は景子ちゃんを救えなかった。そんな自分が救われる思いなんです」。授業を続ける気持ち、鈴木はこう語った。それとともに、みんなの中で景子が生き続けることがうれしくないのではないかと、筆者は思う。中西進・奈良県立万葉文化館長から、「万葉人は、いのちとは生きていくこと自体ではなく、生命が輝いている状態と考えた」と学んだことがある。鈴木が話すことで、死してなお景子の生命は人々の中で輝いているはずである。(文中敬称略)

〔すずき・なほと〕1957年生まれ。81年にアンソニー人社92年に長女が小児がんを発病し、95年に死去。それを機に「いのちの授業」を始め、2004年に会社を早期退職して東京「いのちをバトンタッチする会」を設立。学校・行政・企業等での講演を積極的に行い、これまでに約1万人が参加。

